

JAによる
地域を元気にする
素敵なお話。

ふるさとの

育む人

●今月のお題は...『乳牛・繁殖牛』

育む人 高橋 浩悦さん

横手市大森地区・34歳。4年前に家業の酪農へ転身。
黒毛和牛の繁殖も始めるなど意欲的な専業農家として活躍中。



30歳で会社員から農家へ転身!

自宅から約8kmも離れた農場に、毎日足を運ぶ浩悦さん。農家の高齢化が進む中、若き担い手として就農し、5年目の春を迎えました。約25㌔という広い敷地の農場には牛舎が3棟。乳牛55頭、黒毛和牛30頭を飼育しており、牛乳の生産と繁殖子牛の出荷を手がけています。



高校を卒業後、県内の畜産試験場などで学び、その後8年間は会社員として勤めていましたが4年前に退社。「父が始めた畜産業を一代で終わらせるわけにはいかない」と一念発起し、30歳で専業農家へと転身しました。当時、酪農のみだった経営に、黒毛和牛の繁殖も開始。心強い“高橋家の2代目”として走り出しました。

歯がゆさをバネに貪欲に知識を習得

現在、日々の飼育管理は、父の正(まさし)さんと共にを行っています。浩悦さんが担当しているのは、主に黒毛和牛の繁殖。母牛が生んだ子牛を成長させて市場へ出荷しています。「最初は子牛になかなかよい値が付かず、歯がゆい気持ちが続いた」と、苦笑いをする浩悦さんですが、周囲の先輩農家からアドバイスを受けながら貪欲に知識を習得。努力の甲斐あって、その後は徐々に高値が付くようになりました。浩悦さんは、「最初の歯がゆさを経験した分、努力が結果に結び付いた時の喜びはひとしお」と、笑顔で語ります。

牛への深い愛情を持ち、いまを全力で生きる

牛舎の中では、朝晩2回のエサやりや掃除など、毎日同じ作業が続きます。しかし、相手は“生きもの”。人間と同じように、食欲や体調は日々変化しています。「牛たちが言葉を話せない分、こちらが常に気を配ることが最も大事」と語る浩悦さんの言葉からは、牛たちへの深い愛情が感じられます。



不況のみならず、牛乳の消費低迷や飼料価格の高騰など、現在の経済状況は畜産業においても厳しいのが現状です。それでも浩悦さんは、「どんな状況下にあろうとも、いまできることに全力を注ぎたい」と前だけを見つめます。父の後を継ぎ、「いま」を全力で生きる力強い担い手^{かたわら}の傍では、支えあう彼らを模倣するかのよう^{かたわら}に、親子の牛が今日も寄り添い歩いています。

この記事は JA秋田ふるさとの協力で制作しています。

問合せ先: JA 秋田ふるさと総務課 Tel.0182-25-2634